

令和6

小論文 A

〔180点〕
〔50分〕

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、白紙を除いて、4ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答は、〔令6 解答用紙〕に記述しなさい。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題 次の文章を読んで、後の問い（問1～問3）に答えよ。

思考力・判断力・行動力・表現力といった「新しい学力」が必要であり、求められているのは確かだとしても、それを育成していくにはいくつもの難点がある。

第一に、まず何よりも、新しい学力を伸ばす指導方法を、教師や指導者がどこまで実践できるのかということである。いくら優れた教育でも、実践できないとすれば絵に描いた餅である。

新しい学力を伸ばすには、教師の力量が今まで以上に必要である。教育内容がきっちり決まっていて、それを説明し、きちんと記憶させるという教育であるならば、教師の教育方法上の工夫はさほどいらぬ。つまり、教師自身の教育センスはさほど問われなくて済む。しかし、新しい学力を伸ばす授業となると、教師の側にまず、高度な工夫が求められることになる。

意欲・思考・判断・表現・行動といった諸能力を授業で伸ばす方法を考えるのは、実際には難しい。教師は学習者の意欲や思考レベルがどのようなものであるかをその都度肌で感じ取るとともに、その到達度を客観的に評価する必要がある。一瞬も気を抜かず一人ひとりの状況を把握しながら授業することが、一方向的な授業よりはるかに難しいのは、教えた経験のない方にも想像できるだろう。子どもの学習状況を把握するには、教師の「センス」としか言い様のないものが必要なのである。

センスを身につける、磨くというのは難しい。だが、効果的な教育方法を生徒の状況に応じてその都度編み出し、導入することができなければ、いくらアクティブ・ラーニングを導入したところで、授業は「活性化」しない。一般に、現状でそれを実現できる教育センスのある教師がどれだけいるかといえば、正直なところ疑問が残る。

（中略）

アクティブ・ラーニングを教室の学習の中心的なスタイルとすることは、いかにも理想としてはよいように思う。しかし実際やってみれば、グループ・ディスカッション一つとっても実現は簡単ではなく、さほど効果的ではない、単にだらだらした話し合いが続くことも多い。「調べ学習」といいながら、学習者がさぼってしまうケースもみられる。そうしたいわば「ふわっ」とした緩め

の授業が一年間行なわれたところで、何が身についたかと聞かれても生徒は明確に答えられないということが起こりうる。これなら、今までどおり伝統的な学力^Bを身につけるほうがまだ結果としては生産的だということにもなりかねない。

(中略)

そもそも、アクティブ・ラーニングを主とした授業を一年間、それも毎週行なうことは簡単ではない。というより実際に成功しているケースの方が少ないと思われる。週にひとコマ程度ならば、ケーススタディを中心としたアクティブ・ラーニングを実践できたとしても、その他の授業をすべて同様にすることは難しい。

これに対し、伝統的な学力のように、しっかりと決まった教科書があり、その内容を習得させる授業なら、一年間の授業の実質は保証されやすい。面白くない授業になる危険もあるが、内容上の水準はキープしやすいということである。また、アクティブ・ラーニングの手法にこだわりすぎずとも、別の形で学習者の意欲を育てるような面白い授業をするセンスや力を持っている教師はもちろんたくさんいる。その教師たちは、現行の指導要領に従って伝統的な学力を伸ばしつつも、同時に意欲・思考力・判断力等を高める授業を行なっている。

つまり、「新しい学力」を伸ばす授業をするためには、教師の教育センスが不可欠であり、意欲・思考力・判断力等が何より教師自身に求められているのである。それさえあれば必ずしもアクティブ・ラーニングという手法にこだわる必要はない。伝統的な授業スタイルで成果を上げている教師が、無理にアクティブ・ラーニング主体の授業スタイルに変えることで学習効果が下がるとしたら残念なことだ。

教員免許取得に求められる条件が多くなっていることも響いているのか、教師を目指す学生数が減り続けている今、「新しい学力」を伸ばせるセンスある教師を数多く現場に揃えることができるのかどうか。率直に言って不安の残るところである。

(中略)

新しい学力を育成する際の第二の問題点は、先にもふれた評価の問題^Cである。

「意欲」というものをどのように評価するのか。「情熱があります」「意欲があります」と入試や会社の面接で言う人は多い。し

かし、そのような言葉がはたして、情熱・意欲の証明になるものであろうか。

意欲は内側に秘められていることもある。静かに燃えている形の意欲もある。いかにも活動的で話し合いが巧みであっても、生涯をかけて粘り強く研究を続ける意欲があるとは限らない。(中略)

意欲のみならず、思考力・判断力・表現力・行動力といった諸能力についても、それを評価し、まして点数化することは、伝統的な学力の場合とは比べものにならないくらい難しい。教師が生徒一人ひとりの能力を記述式で評価することになれば、教師の労力は膨大になる。教師はそれらに多くのエネルギーをとられ、生徒の指導に割くエネルギーがむしろ減殺されてしまうだろう。

(齋藤孝『新しい学力』岩波書店、二〇一六、四六〜五二頁、による。一部改変。)

問1 筆者は、「新しい学力」を育成する上での難点として、二重線部^A「まず何よりも、新しい学力を伸ばす指導方法を、教師や指導者がどこまで実践できるのか」ということである」と述べている。筆者がこのような難点をあげる理由について本文の言葉を用いて二〇〇字以内で説明せよ。「八〇点」

問2 筆者は、二重線部^B「伝統的な学力」とはどのようなものであると考えているか、本文の内容に沿って八〇字以内で説明せよ。「七五点」

問3 筆者は、「新しい学力」を育成する際の第二の問題点として、二重線部^C「評価の問題」をあげている。筆者がこのような問題点をあげる理由について本文の言葉を用いて六〇字以内で説明せよ。「二五点」